慶谷　壽信　先生

拝啓

暑い日が続きますが、先生におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

このたび、愛知県立大学の古代文字資料館が刊行する『KOTONOHA 単刊』シリーズの 1 冊として、『語学漫歩文選』（仮）という書物の刊行を企画しております。『語学漫歩』は 1987 年に中村雅之・吉池孝一両氏の手によって創刊され、以後 16 年間で 34 号を数えるまでになりましたが、雑誌の性格上、流通ルートに乗ることも、図書館に収められることもなく現在に至っております。数年前より同誌の総目録をインターネット上で公開しているため、時折その所載論文に関する問い合わせがあり、その都度コピーを郵送するなどして対応しております。この機会にかつて『語学漫歩』に掲載された代表的な文章を一書に収め、誰もが手軽に利用できるような形にしてはどうかと考えた次第です。

今回お便りいたしましたのは、『語学漫歩』の第 8 号（1988 年 6 月 25 日）に掲載された先生の「有坂秀世『劣敗者の人生観』について」と「附：有坂秀世『劣敗者の人生観』」を、この書物に収めさせていただきたいと思うためです。もしこのことをお許しいただけるようでしたら、原稿の再入力と校正はこちらが責任を持って行ないます。また、これまでの『KOTONOHA 単刊』と同様ごく簡素な装丁となりますが、刊行にかかる費用は全額こちらで負担する予定です。現在のところ 11 月の刊行を目指しております。

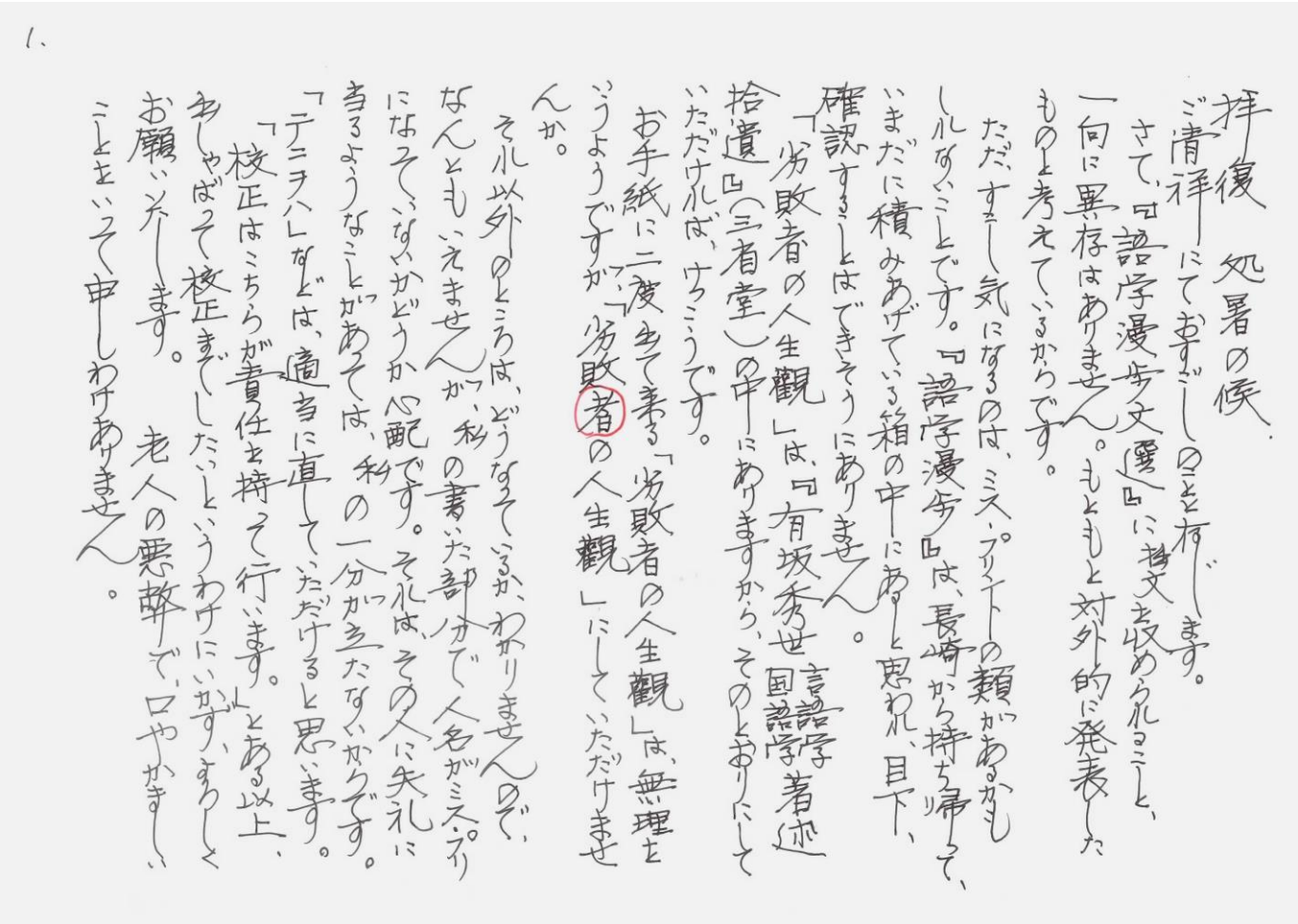
私たちがかつて東京都立大学中国文学研究室で学んだ良き記念として、先生と有坂秀世博士の文章が載ったこの書物を世に送り出すお手伝いができれば嬉しく思います。どうかよろしくご検討下さい。

時節柄お体には充分ご自愛下さい。末筆ながら、先生の益々のご健康をお祈り申し上げます。

敬具

2008 年 7 月 24 日

2008.8.27［慶谷→竹越］



1.

拝復　処暑の候

ご清祥にておすごしのこと存じます。

さて、『語学漫歩文選』に拙文を収められること、一向に異存はありません。もともと対外的に発表したものと考えているからです。

ただ、すこし気になるのは、ミス・プリントの類があるかもしれないことです。『語学漫歩』は、長崎から持ち帰って、いまだに積みあげている箱の中にあると思われ、目下、確認することはできそうにありません。

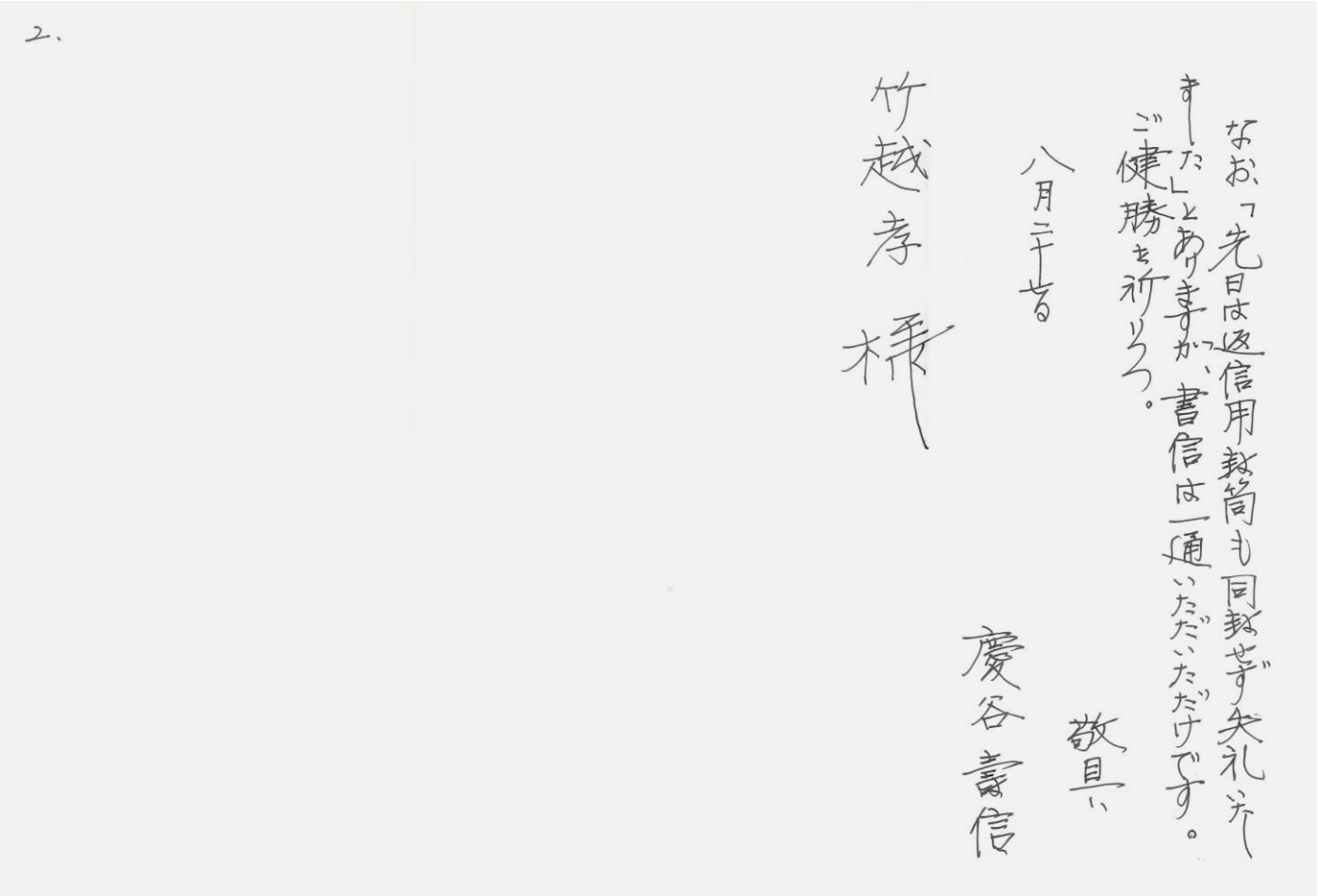
「劣敗者の人生観」は、『有坂秀世 言語学 国語学著述拾遺』（三省堂）の中にありますから、そのとおりにしていただければ、けっこうです。

お手紙に二度出て来る「劣敗者の人生観」は、無理をいうようですが、「劣敗者の人生観」にしていただけませんか。

それ以外のところは、どうなっているか、わかりませんので、なんともいえませんが、私の書いた部分で人名がミス・プリになっていないかどうかが心配です。それは、その人に失礼に当るようなことがあっては、私の一分が立たないからです。

「テニヲハ」などは、適当に直していただけると思います。

「校正はこちらが責任を持って行います。」とある以上、そちらで校正までしたらというわけにいかず、すみませんがお願いします。　老人の悪筆で、口やかましいことをいって申しわけありません。


2.

なお、「先日は返信用封筒も同封せず失礼致しました」とありますが、書信は一通いただいただけです。
ご健勝を祈りつつ。

敬具

八月二十日

竹越孝 様

慶谷壽信

慶谷　壽信　先生

前略

お返事誠にありがとうございました。当方が 7 月 24 日付でお送りした書簡が未着であったとのこと、大変失礼致しました。心よりお詫びを申し上げます。

このたびは、「有坂秀世『劣敗者の人生觀』について」を『語学漫歩文選』に収録させていただくことをお許し下さり、誠にありがとうございました。現段階での目次案を同封いたしましたのでご高覧いただければ幸いです。今回の刊行は、かつての寄稿者の皆様に再録したい自分の文章を選んでいただき、かつそれをご自身で入力していただく（先生は例外です）という計画ですが、今のところ 15 名の方から再録希望が寄せられております。

なお、付録として収められた有坂秀世博士の「劣敗者の人生觀」については、定稿たる『有坂秀世言語学国語学著述拾遺』との重複を避けるべきとの判断から、今回の再録は断念いたしたく存じます。どうかご寛恕下さい。

お手紙を拝読して、やはり先生ご自身に校正していただくに如くはないと思い、第 8 号における当該部分のコピー（B5）と、当方が再入力した原稿（A4）を同封いたしました。通常の校正の要領で原稿の方に朱を入れてご返送いただければ幸いに存じます。また、再録にあたっての付記・コメント等がございましたら、末尾または別紙に書き加えていだだければ反映させることが可能です。

お手数をおかけしますが、どうぞよろしくお願いいたします。

草々

9 月 3 日

2008年9月7日［慶谷→竹越］

1.

拝復　白露の候、

ご清祥にておすごしのことと存じます。

さて、先日来、拙文につきお手数わずらわして、恐縮に存じます。

まず、題が「有坂秀世『方言者の人生観』について」であること、終りの方「ただ、文中にみえる『春山作樹』教授に関連して、一言つけ加えておきたい。……」

竹田教授は東大助教授を兼任していた。」の部分が「方言者の人生観」がなくては、浮いてしまうと思います。

『有坂秀世国語学著述拾遺』との重複を避ける（きだという原則が動かしがたいものであれば右に記した二点から『文選』に収録できないことになります。

『文選』の執筆者をみれば、教員は私ひとりですから、強いて私を含める必要はないかもしれません。前記二点より、「方言者の人生観」を削った形では、寄稿できないと思っていますが、とりあえず、その点についてご返事下さい。

それから、別のことになりますが、当時、ワープロを打つ中村君には無理をいって、有坂氏の書きぐせである「面」を作字してもらいました。今日のコンピューターの技術でどこまで可能なのかわかりませんが、「者→者」のほかに「高橋（穰）教授→穰」、「難→難」、「歎→歎」、「要→要」、「研→研」、「返→返」等々（一部分）旧字体はどこまで可能でしょうか。相当の赤がきてもよければ、校正します。

2.

いろいろ考えていてもしようがないので、とりあえず、ご返事を待つことにします。

ご健勝を祈りつつ。

敬具

九月七日

慶谷壽信

竹越孝様

慶谷　壽信　先生

前略

早速のお返事ありがとうございました。

先生が文字通り心血を注いでお作りになった『有坂秀世言語学国語学著述拾遺』所載のものと全く同じ文章を掲載することは、屋上屋を重ねることになり却って失礼ではあるまいか、という考えでしたが、お手紙を拝見しまして、当方の考えが浅はかであったことを知りました。謹んでお詫び申し上げるとともに、当初の予定通り「劣敗者の人生観」も付録として掲載させていただきたく存じます。

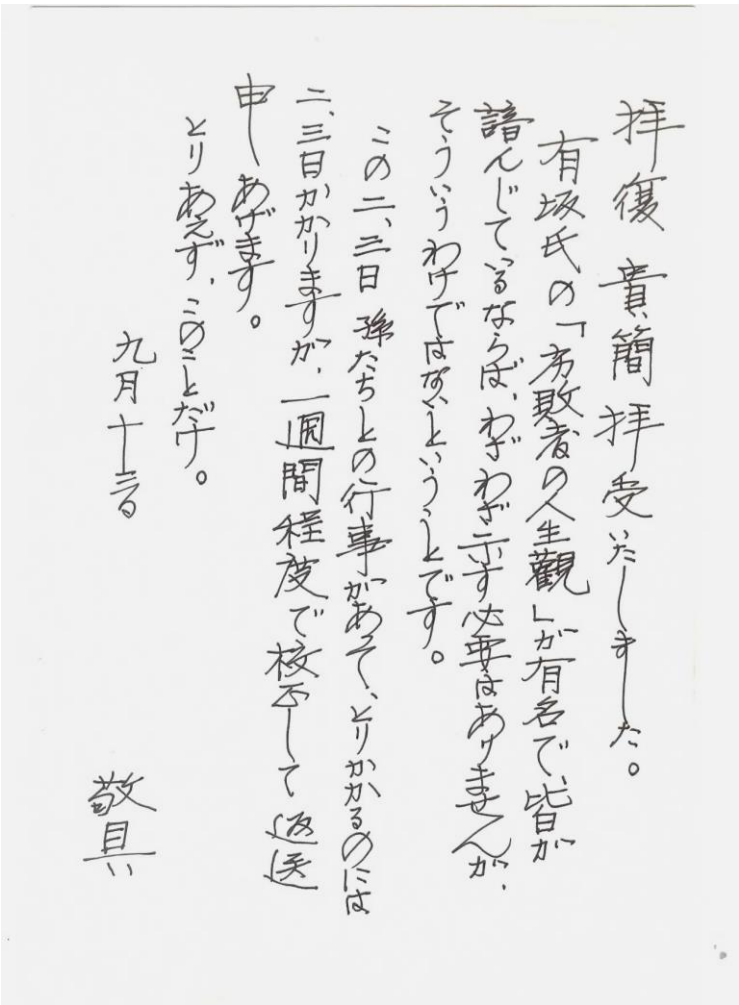
つきましては、改めて校正用の入力原稿を同封させていただきますので、朱を入れてご返送いただければ幸いです。先生の「有坂秀世『劣敗者の人生観』について」は先にお送りした『語学漫歩』第 8 号をもとに（固有名のみ旧字体に変更）、また有坂秀世「劣敗者の人生観」は『有坂秀世言語学国語学著述拾遺』をもとに入力し直しました。誤脱の訂正はもとより、字体の問題に関しても可能な限り先生のご希望に沿う形で対応したいと思いますので、遠慮なくご指摘下さい。また、再録にあたっての付記・コメント等がございましたら、書き加えていただければ反映いたします。

それでは、何度もお手数をおかけして恐縮ですが、どうかよろしくお願いいたします。

草々

9 月 11 日

2008.9.13［慶谷→竹越］



拝復　貴簡拝受いたしました。

有坂氏の「劣敗者の人生観」が有名で皆が
誦んじているならば、わざわざ示す必要はありませんが、
そういうわけではないということです。

この二、三日　孫たちとの行事があって、とりかかるのには
二、三日かかりますが、一週間程度で校了して返送
申しあげます。

とりあえず、このことだけ。

九月十三

敬具

2008.9.23［慶谷→竹越］

拝復　彼岸の候となりました。
ご清祥にておすごしのことと存じます。
さて、校正の件、あまり細かいことにこだわるのも礼に反すると思い、「責了」にしました。後はすろしくお願い申します。
ところで、最近のパソコンでは、相当細かいところまで表現できるものと知りました。
『著述拾遺』の校正は、私もやったはずですが、統一の礼ていないところがありました。たとえば、「化」と「化」、「評判」と「評判」等です。
「成」は、「丁」が声符なので、古い字形は「成」になっていることが多いと思います。
「博」の字は、拡大鏡でよくみましたが、「博」ではありませんでした。確かに、下のつき手しの部分は多い字形のほうが、ふとい筆の差からそうなるのでしょうか。
「豐」とか「斷」とかも、拡大鏡で確かめました。受ける感じが違うので、拡大鏡でみたりするのでしょう。
本日、投函することはできますが、重さが超過していないかどうかを確認するのに郵便局で計りたいため、一日おくれます。
ご健勝を祈りつつ。
九月二十三
敬具
慶谷壽信
竹越孝様

2008.10.9［慶谷→竹越］

拝啓　寒露の候となりました。
ご清祥にておすごしのことと存じます。
さて、『語学漫歩』の校正、九月二十四日に投函しました。書留にもせず、コピーもとりませんでした。
請求のないのは、とどいたからだとも考えますが、請求しにくいこともあるかとも考えまして、ご多忙のところ、恐縮に存じますが、着否についてお知らせ下さい。
右、とりあえず、一筆申します。
十月九日
敬具

慶谷　壽信　先生

前略

先日の語学会で先生のお元気な姿を拝見して大変嬉しく思いました。さて、本日『語学漫歩選』に収めるすべての原稿を印刷製本に回しましたので、ここにご報告申し上げます。当方の怠惰による編集作業の遅延をお詫びするとともに、先生のご理解とご協力に対し、改めて深甚の感謝を申し上げる次第です。

結果として、16 名の寄稿による、200 ページを越える書物が刊行される運びとなりました。目次を同封いたしますのでご高覧下さい。書誌情報は次のようになっております。

タイトル：語学漫歩選
叢書名：『KOTONOHA』単刊 No.3
編・発行：古代文字資料館（愛知県立大学 E511 研究室内）
発行日：2008 年 10 月 31 日
印刷製本：愛知県立大学生活協同組合
ページ：本文 220 頁＋目次 2 頁
版型：B5
ISBN：978-4-904038-03-1

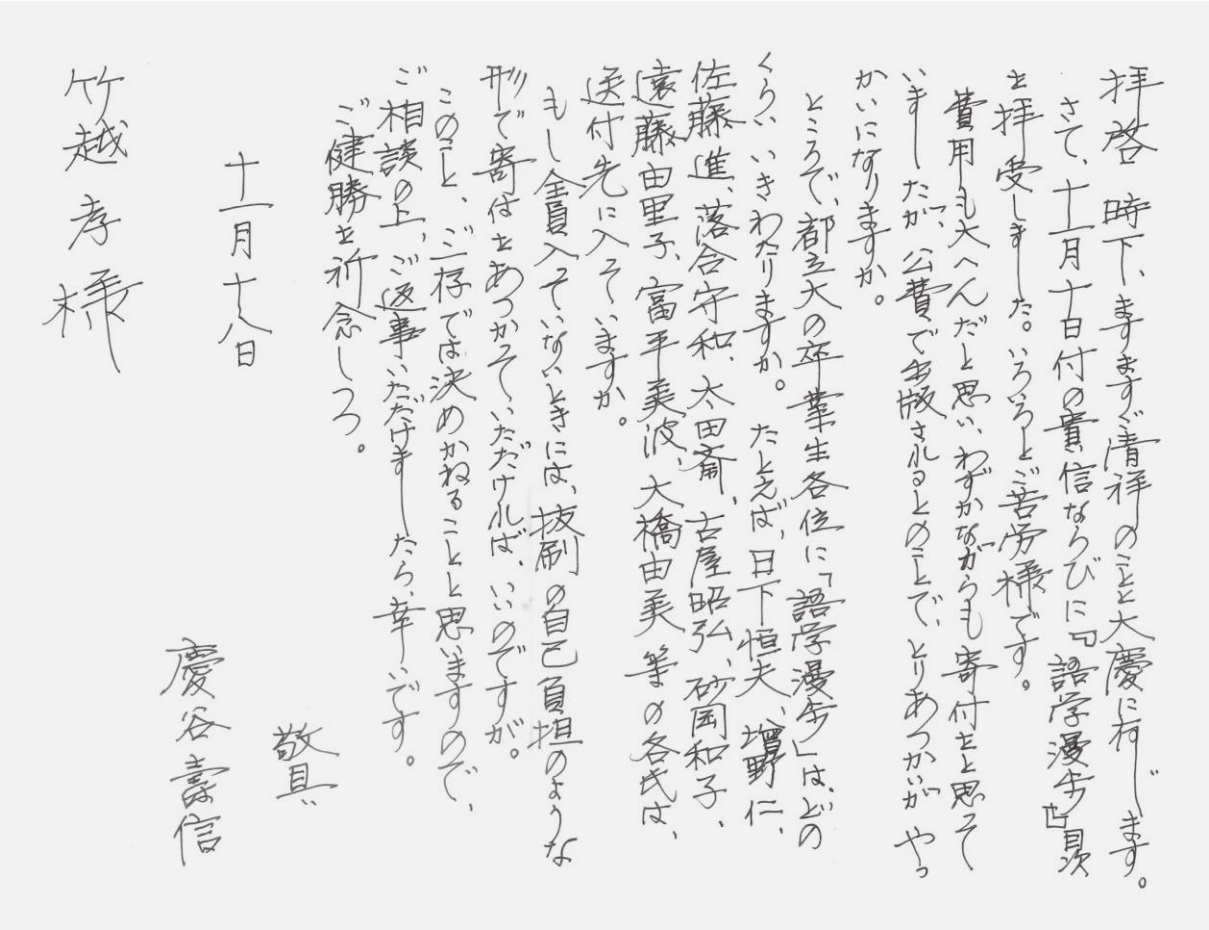
公費（具体的には当方の研究費）を使って印刷製本を行いますので、ダイレクト印刷のごく簡素な装丁となりますがご了承下さい。11 月の末、あるいは 12 月の初めに、お手元にお届けできるかと思います。なお、ご寄稿いただいた方には一律 10 部を進呈する予定になっております。

それでは今後ともよろしくお願い申し上げます。

草々

11 月 10 日

2008.11.18［慶谷→竹越］



拝啓　時下、ますます清祥のこと大慶に存じます。
さて、十一月十日付の貴信ならびに『語学漫歩』見本を拝受しました。いろいろとご苦労様です。
費用も大へんだと思い、わずかながらも寄付をと思っていましたが、公費で出版されるとのことで、ありがたいかやっかいになりますか。
ところで、都立大の卒業生各位に「語学漫歩」は、どのくらい、いきわたりますか。たとえば、日下恒夫、増野仁、佐藤進、落合守和、太田斎、古屋昭弘、砂岡和子、遠藤由里子、富平美波、大橋由美等の各氏は、送付先に入っていますか。
もし含まれていないときには、校刷の自己負担のような形で寄付をあつかっていただければ、いいのですが。
このこと、ご存じでは決めかねることと思いますので、ご相談の上、ご返事いただけましたら、幸いです。
ご健勝を祈念しつつ。

敬具

十一月十八日

慶谷壽信

竹越孝様

慶谷　壽信　先生

拝啓

師走となって慌ただしさが増してまいりましたが、先生におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

長らくお待たせしておりました『語学漫歩選』ですが、奥付に記した発行日からちょうど1ヶ月遅れとなる先週末に無事出来し、先生に向けて発送できる運びとなりましたので、ここにご報告申し上げます。

いただいた校正と対照させつつ、くれぐれも誤脱のなきことを心に期したつもりではありますが、もし不幸にしてそういったものが生じておりましたら、当方の注意力不足を伏してお詫びする以外にないと考えております。返信にてお知らせいただければ、正誤表を出す形で対応したいと思っております。

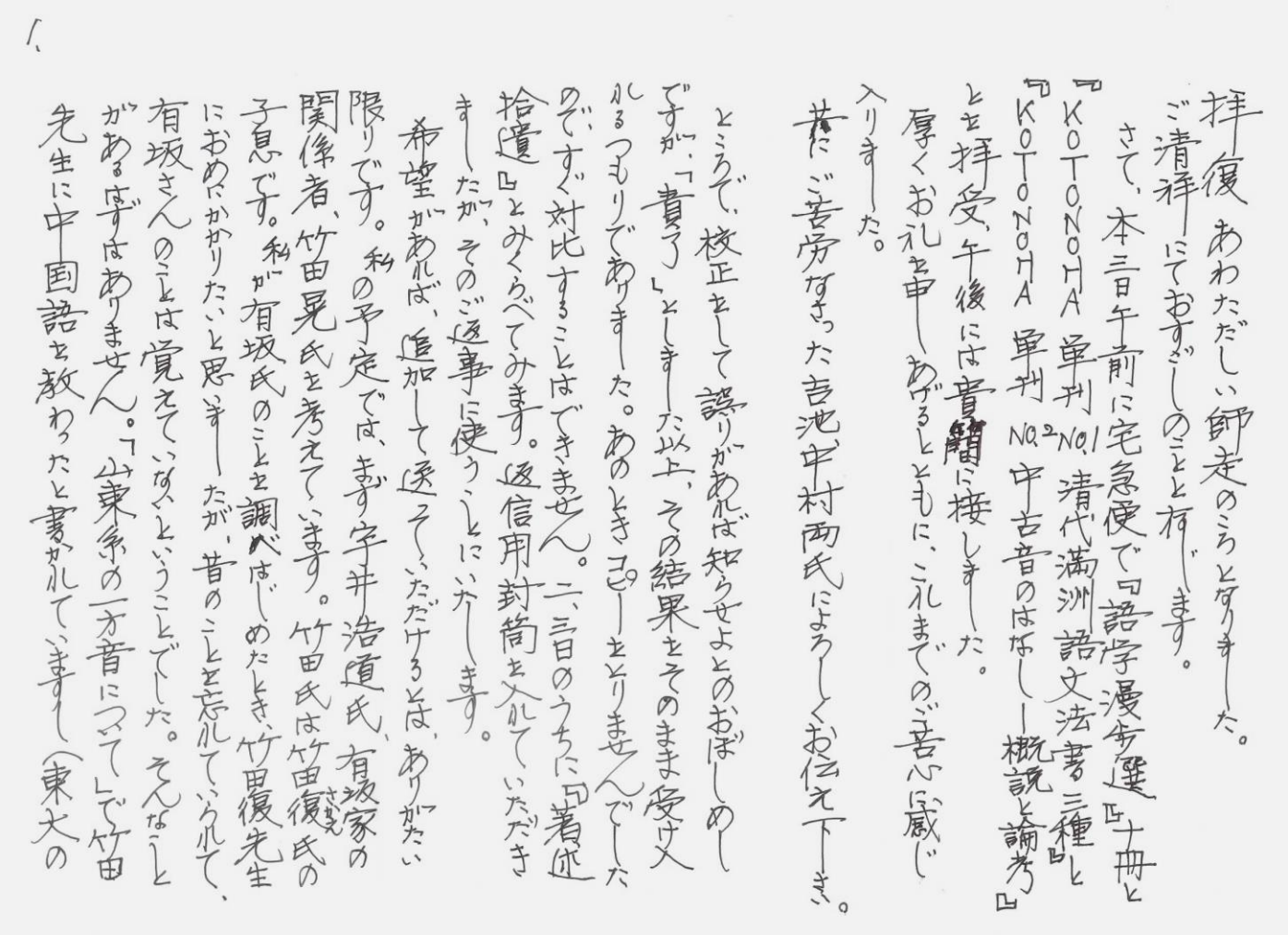
先にお伝えしました通り、先生には10部を進呈いたします。また、勝手ながら既刊の『KOTONOHA 単刊』2冊も同封いたしました。先便で名前を挙げられました都立大学OBの諸先生方にも、当方からお送り申し上げます。ご希望があれば追加注文も承りますので、遠慮なくお申し付け下さい。

先生のご指導とご鞭撻により、先生と有坂博士の文章を巻頭にいただいた文集を世に送り出すことができたことを大変嬉しく思っております。改めて深甚の感謝を申し上げますとともに、愛知・長久手の地より益々のご健康を祈念いたしております。

敬具

12月2日

2008.12.3［慶谷→竹越］



拝復　あわただしい師走のころとなりました。
ご清祥にておすごしのことと存じます。
さて、本日午前に宅急便で『語学漫歩選』十冊と『KOTONOHA 単刊 No.1 清代満洲語文法書三種』と『KOTONOHA 単刊 No.2 中古音のはなし―概説と論考』とを拝受、午後には貴簡に接しました。
厚くお礼を申しあげるとともに、これまでのご苦心に感じ入りました。
特にご苦労なさった吉池・中村両氏によろしくお伝え下さ。
ところで、校正をして誤りがあれば知らせよとのおぼしめしですが、「責了」としました以上、その結果をそのまま受け入れるつもりでありました。あのときコピーをとりませんでしたので、すぐ対比することはできません。二、三日のうちに『著述拾遺』とみくらべてみます。返信用封筒を入れていただきましたが、そのご返事に使うことにいたします。
希望があれば、追加して送ってくださるとは、ありがたい限りです。私の予定では、まず宇井治道氏、有坂家の関係者、竹田晃氏を考えています。竹田氏は竹田復氏の子息です。私が有坂氏のことを調べはじめたとき、竹田復先生におめにかかりたいと思いましたが、昔のことを忘れていられて、有坂さんのことは覚えていないということでした。そんなことがあるはずはありません。「山東系の一方言について」で竹田先生に中国語を教わったと書かれていますし（東大の

2.

成績表でも確認できます。)、「見舞金趣意書」に発起人として名を列ねています。でも、ご病気でしたし、お会いするのを遠慮しました。

特に関係者でない人では、平山久雄氏等を考えています。ただ、平山氏のところには、ほかからも、たとえば中村氏しか吉氏からとどくかもしれません。しかし、調整するよりも重複すれば、平山氏がほかの人にわたされることでしょう。

今、あつかましいお願いをお許しいただけるのなら、つぎの二人に送っていただけるでしょうか。

住所等個人情報のため削除

古代文字資料館

3.

以上、まとまりなく書き列ねましたが、ご判読下さい。

右、まずは一筆、お礼とお願いまで。

ご健勝を祈念しつつ。

敬具

十二月三日夜

慶谷壽信

竹越孝様

2008.12.7［慶谷→竹越］

1.

拝復　大雪の候、ご清祥にておすごしのこと存じます。

さて、貴翰拝受いたしました。お忙しい中、何度も何度も私ひとりのためにお使りいただきまして、本当に申しわけなく思っております。

このたび、校合のコピーを送っていただきまして、助かりました。『語学漫歩選』の印刷は、『著述拾遺』の不統一も正して、最高のできです。コピーをいただくまでは、何べんかみくらべましたけれども、精神が散漫とした状態で、自信がもてませんでした。

お忙しい中、個人的なことを託して、お時間をとり恐縮ですが、私は、愛知県大、沖縄大の学会を欠席して、今年は何とか参加したいと思っておりました。宿も2月中に予約し、坐骨神経痛もやわらげたいと思い、ずいぶん散歩につとめました。どうやら学会に出席したら、気が抜けて調子をくずしました。京都でおめにかかったとき、すでに頭髪は薄くなっていたでしょうが、その後1ケ月ほどの間にすっかり薄くなっております。これは一例にすぎません。若い方には想像もできないでしょう。

内田、吉田両氏のこと、ありがとうございました。厚くお礼を申しあげます。

これからいよいよ厳しい寒さに向かいます折から、おからだ大切になさってよいお年をお迎え下さい。

右、まずは一筆お礼まで。

敬具

2.

十二月七日

竹越孝様

慶谷壽信